



モダン寺新聞
 ~今月の記事~
 一口法話「南無阿弥陀仏を信じて生きる」
 連続掲載
 第七回「仏教ここが知りたい」
 神戸別院行事レポート
 別院掲示板

4 P	3 P	2 P	1 P
-----	-----	-----	-----

一口法話
 「南無阿弥陀仏を信じて生きる」

浄土真宗のご本尊（信仰の対象）は阿弥陀如来です。しかし、私たちを救う用（はたら）きという意味の上から言えば、もう一つご本尊があります。これが「南無阿弥陀仏（ナモアマミダブツ）」です。阿弥陀様は私たちを直接救わないのです。南無阿弥陀でお救いなのです。ですから南無阿弥陀仏は紙に書かれた文字ではありません。本願力とも言い表されるように、私たちを救う、生きた用きなのです。

では、南無阿弥陀が何故、私たちを救うことが出来るのでしょうか。それは、南無阿弥陀仏が、私たち人間の知恵を飛び越えた仏智だからです。阿弥陀経に「阿耨多羅三藐三菩提（アノクタラサンミヤクサンボダイ）を得て、もろもろの衆生のために……と出てきますが、この阿耨多羅三藐三菩提のことです。日本語に訳すと無上正遍智（むじょうしょうへんち）この上のない最高のあまねく正しい智恵。この本体は至心（真実心）です。このとてつもない知恵が、私たち凡夫の知恵（凡知）に飛び込んでくるから、私たちを救うことが出来るのです。

この濁世（じょくせ）の中で私たちは、強くもないのに強がって賢くもないのに賢ぶって生きている。そのくせ、いつも人の上には立ちたいという心をもって生きている。「あなた。癌ですよ。あと三カ月」と言われれば、いっぺんに押しつぶされてしまうような弱い、暗い、見通しを持たない私たちの知恵を凡知といいます。この凡知に仏智が飛び込んで下さるのを、親鸞聖人は「南無阿弥陀仏の回向（えこう）」と教えて下さるのです。

仏法を聞いては口に念仏を称えるという信仰生活を真剣に続けていると、仏智が凡知に届いて下さるのです。「不可称不可説不可思議の功德は行者の身にみたり」（和讃）、歓喜の心いっぱいいただと共に、凡知が凡知であることをまざまざと知らされながら、軽く軽くなっていく、明るく明るくなっていく、不思議な不思議な生きる力を与えられるのです。真実心は必ず生きる力となって実を結ぶのです。

宗粟組 安楽寺 黒田 真隆 師

第六回

「仏教 ここが知りたい」

「360」PRAYER

昨年の十二月十日付けの毎日新聞に、皆さんもご存知とは思いますが、「祈り」公認。浄土真宗本願寺派」という見出しが掲載されました。しかしこれは事実とは異なる誤解を招く表現であったため、本願寺派は毎日新聞に申し入れをしました。

さて皆さんは「祈り」ということをどのようにイメージされているでしょうか。一般的に日本語の「祈り」という言葉からイメージされることは、現世祈願、いわゆる家内安全祈願、交通安全祈願、合格祈願等といったものです。

浄土真宗は「祈りなき宗教」とされてきました。それは、自分の欲を満たすだけの願いをするのが、迷いそのものの姿であり、反省すべきものといえるからです。私の方から祈って救われるのではなく、むしろ逆に如来の方から願われて

救われていくところに浄土真宗の世界があります。私たちが祈ろうが祈らないでおこうが、阿弥陀仏はすでに私たちに救いはたらきをして下さっているのです。

このように、「祈り」という言葉のイメージが「現世祈願」として理解されていることから、浄土真宗ではこの言葉に対して注意深く、気を付けて使わないようにしているのです。

一方、「祈り」の意味を調べてみると、そこには従来の意味とは別に、「心から望む、希望する、念ずる」とも表現されています。

また「祈り」は、英語の Prayer (プレイヤー) の訳語として使われており、神との対話という意味を指しているのです。

今回本願寺派が「祈り」という言葉を使用したのは、世界宗教との対話、他宗教との対話を望むことを念頭に入れたものであり、日本の現世祈願としての「祈り」を認めたわけでは決してないのです。

私たちは真宗の信心の上から「祈り」という言葉を十分理解して、考えていく必要があると思います。

「神戸別院のお内陣」

(前号に続き)

宮 殿 ～屋根～

宮殿(くうでん)とはご本尊を安置する厨子(ずし)のことです。厨子という名称は厨房(台所)の調度品を収納する容器の形に似ていたところに由来する、といわれています。仏具としては、経典・

仏画などを収納するための容器だったものが、仏像などを安置するためのものとして定着し、後に扉を開けて礼拝する様式に発展したのであろうと考えられています。ちなみに、日本における厨子の登場は仏教伝来初期のことであったといわれます。現物としては「玉虫厨子」が当時のものとして奈良の法隆寺に伝えられています。

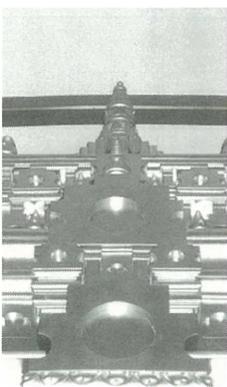
さて、神戸別院のお宮殿ですが、今回はその屋根の部分に注目してみましよう。

この屋根は釈尊成道(じょうどう)の地(お悟りを開かれた聖地)、ブダガヤーにある大塔を模したものです。この大塔は、アシヨカ

王(前号を参照)が紀元前三世紀頃に建立した精舎(しょうじや、寺院のこと)がはじまりで、その後、幾度かの増改築が施され五七世紀頃には塔の増築が完了し、その後壊れていましたが、十九世紀にイギリス人カンニガムによって発掘修理され現在もなおその姿を留めています。

この地で釈尊は独り、アシビツタ樹の下に行き吉祥草を敷いて座し、十二月八日の明け方にお悟りを開かれました。そのことから、アシビツタ樹は菩提樹と呼ばれるようになりました。成道の後、釈尊はこの尊い教えを人々に説くべきか否か思惟されました。しかし梵天の勧めを受け、教えを説くことを決意されました。そしてまずは共に苦行を行った五人に説き示すため、サールナート(鹿野苑、ろくやおん)に赴いたのでした。

(つづく)



□◇◇神戸別院行事レポート◇◇□

■「いのち」を考える研修会

六千四百三十三人の命を奪った阪神・淡路大震災から、今年一月十七日でまる八年を迎えました。当日は各地で追悼法要や行事が営まれるなか、神戸別院においても物故者総追悼法要を厳修し、「一・一七『いのち』を考える研修会」を開催いたしました。(表紙参照)

震災後別院では、この日に「阪神・淡路大震災物故者総追悼法要」として法要を営んできましたが、この大震災を通して「いのち」の尊さを学ぶ研修の必要性をアピールするため、今年からは法要に引き続き研修会を開催することとなりました。

午後一時三十分より本堂にて追悼法要をお勤めし、参拝に来られた二百五十人以上の方が、お焼香されました。お勤めの後には井上輪番より「建物や道路が寸断され尊い多くの人命が失われた。お参りの方の多くは家族や友人を亡くされた経験をもっておられると思います。心の傷は残っていると思えますが、この法要をご縁として亡き人を偲びつつ、共に私たちが

立ち上がっていかねばなりません。八年は経過しましたが、その思いを風化させることなく、これからも語り伝えていかねばならない使命が神戸の人間にはあると思います。今日は共に学ばせていただきますしよう。」と挨拶がありました。

引き続き、場所を一階研修ホールに移して「一・一七『いのち』を考える研修会」を開催しました。研修会には参拝に来られた大勢の方と、兵庫県内外より沢山の寺院関係者が参加くださいました。講師には震災当時の前兵庫県知事(現阪神淡路大震災記念協会理事長)で神戸別院の門徒の具原俊民氏を迎え、「阪神・淡路大震災に想う」というテーマで講演をいただきました。大震災の状況をデータを交えながら振り返り、その中で大都市に生きる私たちの今後の課題を考えさせられました。



■春季彼岸会

三月二十一日、彼岸中日より前後三日にわたって春季彼岸会・納骨者総追悼法要を厳修しました。講師には京都の大林秋城(しんばやし しゅうじょう)師を三日間にわたって迎え、「阿弥陀さまってどんな方」という講題でご法話をいただきました。

彼岸の中日の午前十時より「門信徒のつどい」を開催しました。三十余名のお同行のお参りをいただき、賑々しく行われました。今回は前半に「お仏壇の飾り方」というテーマで、お仏壇にまつわる各々の意見を交換しました。家庭の中心であるお仏壇についてあらためて問い直すことができ、意義深いものとなりました。また後半では、阪神西組源光寺の釋氏清子師をお迎えし、「仏教讃歌」を学びました。釋氏先生のテンポよいご指導と軽快なオルガンにあわせて、八曲の讃歌を教わり、一同楽しく唱和いたしました。つどい終了後には神戸別院仏教婦人会の皆様のご奉仕により、お齋をいただき、共に親睦を深めました。

また法要後には、神戸別院仏教婦人会の有志の方が作ってくださった「おはぎ」を参拝者全員に配りました。

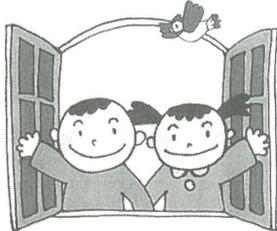
お彼岸の間には納骨所にも大勢のお参りがありました。それぞれのご先祖をお偲びしたあと、実は大勢の方が本堂の法要にお参りくださいました。

■モダン寺子ども会

三月十五日(土)、小雨の中「モダン寺土曜子ども会」の終業式が行われました。

毎月第四土曜日、「おはよう」の声で始まる子ども会。三月を区切りとし、八人の子ども達に「精勤賞」「努力賞」が授与されました。井上輪番による本堂での表彰状授与に、子ども達は少し緊張した面持ちでしたが、その後の茶話会では一年の思い出を振り返り楽しく過ごしました。

学校とは違うお友達と一緒に阿弥陀さまの前で式を迎えた事、良き思い出となったのではないでしょう。うか。



別院揭示板

行事予定

五月

●第一土曜仏教講座

三日(土)

講師 本願寺派布教使

講題 「悪人の救済」

午後一時三十分
安方 哲爾 師

●別院仏教婦人会定例法座

七日(水)

講師 加古川組 普光寺

午後一時三十分

●別院常例法座

十五日(木)・十六日(金)

講師 網干組 政源寺

講題 「ありがとう」

午後一時三十分
赤松 義光 師

●宗祖降誕会法要

十八日(日)

講師 和歌山教区 願成寺

講題 「弥陀の本願」

午後一時
高橋 厚生 師

六月

●第一土曜仏教講座

七日(土)

講師 中央仏教学院講師

講題 「真実の教」

午後一時三十分
北島 隆晃 師

●神戸別院永代経法要

十五日(日)・十六日(月)

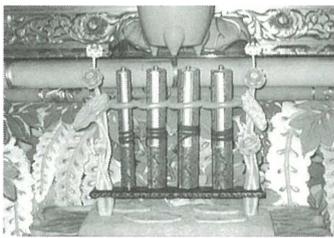
講師 北摂組 願生寺

講題 「善導独明よりふしが変わるのほなせ」

午後一時三十分
柳川 真隆 師

よろこび

待望の新しい神戸別院教化センターが建立・落成されて早や八年をむかえられます今日この頃、荘厳な本堂で正しいおみ法をお聴聞させて頂きたい。そのよろこびを多くの法友にお伝えしたい。お若い方々にも、ご一緒にお参り頂ける様よびかきたい願いで、折りから、教区「若婦の集い」は平成十四年十一月、第十五回目の記念大会を開催させて頂きました。



三十九組の地場産の新鮮な品々や手作りの小物、日用品、雑貨用品等々のご提供のもと、教区仏婦の皆様にお力添えを頂き、おかげ様で完売することが出来ました。心安らぎ、なごみ、癒される場、この神戸別院本堂のよろこびを形あるものに記念として残したい仏婦会員の総意より、「塗香器(ずこうき)」「立経台(りつきょうだい)」「それに「緋毛氈(ひもうせん)」をお供えさせて頂きました。

これからもこの本堂で阿弥陀如来様にお見守り頂きながら、たくさんのご縁を御同朋と賜りたいこととございます。合掌

柴田 克子

ご挨拶

中島 賢潤(転勤)

この度、四月一日付けをもって本山宗務所勤務になりました。神戸別院・江並教堂で、わずか二年一ヶ月でしたけど、皆様方にお育てをいただき心から厚くお礼を申しあげます。

九條 義宣(新任)

この度、熊本の人吉別院から参りました。出身は滋賀県になります。ここ神戸は、私にとって憧れのような街でもあり、教化活動をさせて頂いてだけることを大変光栄に感じております。沢山のご門徒さんと仏法を通し知り合えることを、うれしく思っています。どうぞ宜しくお願い致します。



別院への御懇志

神戸別院責任役員の佐藤恭也様より百万円の御懇志がありました。これを門信徒の教化費として収納させていただきました。御懇志ありがとうございます。

法務日誌

落花が惜しまれる今日この頃です。三月・四月は卒業や入学、就職等とさまざまな別れや出会いの季節ですね。神戸別院においても新しい仲間が加わり、私自身も当時の初心を思い返されます。お互い気持ちを一新して聴聞しましょう！